

10月17日 マタイによる福音書25章1～13節 今日の説教から
説教題：「私たちは天の国に招かれています」

皆様の故郷は、この岩手県でしょうか。別の県からやって来ていま岩手県に住んでいる、という方もいるかもしれません。かつて自分が住んでいた場所の自然や建物から「故郷」というものを思い起こすこともあるれば、「自分の両親がいる場所こそ自分の故郷である」と感じる方もいるでしょう。私たちは特に人や物、記憶によってそこが故郷であると理解しているのだと思います。

一方で、私たちはキリスト者として「私たちの故郷は天の国である」という認識もあります。これはヘブライ人への手紙11章13～16節に記されている言葉で、「この人たちは皆……自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。……もし出て来た土地のことを思っていたのなら、戻るのに良い機会もあったかもしれません。ところが実際は、彼らは更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいません。神は、彼らのために都を準備されていたからです」とあります。私たちが生きるこの世界は、キリスト者としては仮住まいの世界であり、帰るべき場所としての故郷が神様のもとに用意されている。私たちはそのような信仰を持っています。

ただ、私たちはこの天の故郷、天の国というものを、普段あまり意識することがありません。「天の国ってどんな所？」と聞かれても、なかなか上手に説明するのが難しいのではないかでしょうか。今日の聖書箇所では、イエス様はこの「天の国」というものについて、当時の「結婚」にたとえて語っています。

ここにたとえられている10人のおとめは、私たち人間です。そして、遅れてやってくる花婿はイエス様であるとされています。イエス様の再臨によって終末の時が示されて、裁きの後に天の国に入れられることになりますから、今日の聖書の言葉は「いつ来るか分からないイエス・キリストの再臨の時までしっかり備えておきなさい」という意味として受け止めることができます。それは自分が生きている間に来るのか、それとも死んで神様のもとに召された後に来るのかを、私たちは知ることができません。いつ来るか分からぬ物事について、私たち人間は常に意識できないものです。だからこそ一つ目の前の物事に気を取られて、大事な物を見失ってしまうのです。かつて私たちが「自分中心」という大きな罪から「神様中心」へと悔い改めたように、私たちは自分の利益や世の中の都合ではなく、本当に優先すべき神様の言葉を教えてもらっています。それを常に意識し、キリスト者としての自覚をもって日々を歩むことが求められているのです。

神様が私たちのために示してくれている天の国、天の故郷は私たちが生まれた場所でもなければ、いまだ住んだこともない場所です。しかしそこは確かに、イエス様の兄弟姉妹となった私たちを「我が子」として招いてくれている神様がいる場所であり、将来私たちが神様の子として受け継ぐことになる場所であります。その時、私たちはアダムとイブの時代に断たれてしまった神様との交わりが、完全な形で復活する様子を見る能够のでしょう。新しい体によって、新しく与えられる場所で、私たちは神様のもとへ、イエス様のもとへ招き入れられるのです。その希望を胸に、今週一週間の、これから歩みを共に進めましょう。

今日の説教箇所：マタイによる福音書 25 章 1～13 節

- 1:「そこで、天の国は次のようにたとえられる。十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えて行く。そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。愚かなおとめたちは、ともし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた。ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった。
- 6:真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに言った。『油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです。』賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来てなさい。』愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。
- 11:その後で、ほかのおとめたちも来て、『御主人様、御主人様、開けてください』と言った。しかし主人は、『はっきり言っておく。わたしはお前たちを知らない』と答えた。だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」